



発行:みなと元町タウン協議会 住所:〒650-0022 神戸市中央区元町通3-13-1協和会館内 発行人:奈良山喬一 編集人:岩田照彦 電話・FAX:078-391-0831

「誰もが安心して、子どもを生み育てることができる街」をめざして

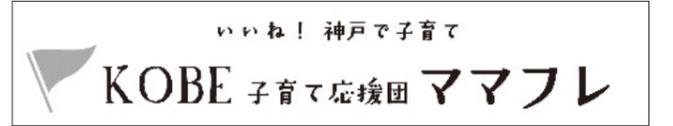
こども家庭局長 森下 貴浩



みなと元町タウン協議会の皆様におかれましては、本市の子ども・子育て支援にご理解・ご協力をいただき、誠にありがとうございます。
 子どもの健やかな育ちや育児不安の解消、子育て世代の経済的負担の軽減などのため、こども家庭局では、妊娠・出産・子育てにおける「切れ目のない支援」のさらなる充実と、「子育てしやすい環境の整備」を進め、誰もが安心して、子どもを生み育てることができる街の実現を目指し、様々な施策に取り組んでいます。

しました。ひろばには、すべり台などの大型遊具等を設置し、遊びを通じて、子どもたちの体力・知力の向上を図っています。

こうした新たな取り組みのほか、神戸市子育て応援サイト「ママフレ」では、子育て世帯を対象にした行政サービスを簡単に検索できるようにするなど、子育てをする方々がニーズに応じて、様々な施策を利用できるよう取り組んでいます。



・元町地域との連携

子育て支援拠点・小規模保育所等

神戸市では、大学等に乳幼児が自由に遊べるスペースを設け、子育て支援の場を提供しています。元町周辺においても、商店街のご協力のもと、元町通6丁目商店街の店舗スペースを活用して、「子育て支援センター・ときわんモトロク」を神戸常盤大学が運営しています。

また、平成30年4月には、同じく元町商店街の店舗スペースを活用して、0～2歳の子どもを預かる小規模保育事業所「元町はっと保育園」を開設しています。

さらに、元町周辺には、企業が設置する「企業主導型保育事業所」が多く開設されているなど、本市の子育て支援に積極的にご協力いただいています。

オレンジリボンウォーク

毎年11月は「児童虐待防止推進月間」であり、シンボルマークであるオレンジリボンを広く周知するとともに、市民の方々に児童虐待の防止・早期発見を呼びかけるため「オレンジリボンキャンペーン」を実施しております。キャンペーンでは、親子で楽しめるイベントやシンボル施設のライトアップなど様々な取り組みを行っています。その中で、平成28年度から「オレンジリボンウォーク」と題して、三宮センター街から元町商店街を通して、ステージイベントを行っているハーバーランドまで、オレンジ色のTシャツや風船などを持って親子が歩くイベントを実施しています。その際、商店街の方々には店頭での応援や街頭啓発にご協力いただいています。

改めて、元町商店街をはじめとした地域の方々のご協力に感謝申し上げますとともに、今後も、地域の方々のご協力をいただきながら、子どもたちが健やかに育まれるようきめ細かな施策を推進していきます。

最後になりましたが、みなと元町タウン協議会の皆様のご活躍とご発展を心から祈念いたしますとともに、引き続き、神戸市の子育て支援施策へのご協力を賜りますようお願いいたします。

「元町・夢街道」

書店の話(26) 船井弘文堂②

岩田 照彦

明治二十五年 新撰公用文 高崎是編 弘文堂刊
 明治二十六年 名区勝地 神戸市案内 村岡藤太郎編 船井弘文堂刊
 明治二十七年 小学校毛筆画教授法 小野辰太郎著 船井弘文堂刊
 明治二十九年 兵庫史談 浅羽肅也著 船井弘文堂刊 暗記速算・改良珠算術独習書 神代利紀著 船井弘文堂刊
 この記録から見ると、はじめの刊行物は明治十三年だから、元町では鳩居堂に次いで開業した出版業者ということになる。外国人も含め、近隣の各地から一旗揚げようと神戸へ押し寄せる人の動きをみて、船井政太郎は、地元生きてきた者として忸怩たる思いがあつたらう。数々の寺子屋が生まれ、教育の場としても地域の先端を歩んできた土地柄である。それを引き継いでゆく道として政太郎が挑戦したのが書物出版の世界だった。

政太郎の刊行物は多岐にわたる。教科書関連書では習字、修身、男女の体操、珠算、作文、毛筆画があり、実生活の世界では、商家用英語、支那貿易、公文、公正証書嘱託人必携、契約者必携がある。神戸市の関係には、神戸市公民名簿、神戸市案内があり、弘文堂自身が編

集したものではありません。「軍歌」「新体誌歌」が出る。日東館をはじめた石丸甚八が神戸へ出て来たとき縁のあつた兵庫明道会の設立者である目加田栄の著書「辨斥魔教論」が明治十九年、船井弘文堂から刊行されている。石丸甚八が独立して出版事業を始めるのは明治二十四年だから、石丸が船井弘文堂刊行の同書を手に親しんだ日の姿が想像される。

政太郎が、書籍の出版に奔走している一方で、神戸にも新聞が登場していた。神戸で発行された新聞は明治五年の「神戸港新聞」にはじまるが、政界で党派の色合いが明瞭になってくると明治十三年には改進黨の声をとりあげる「神戸新報」が登場する。明治十七年には「神戸又新日報」が創刊され、同じ年、大阪朝日が神戸支局を開設する。明治十九年四月には、県令内海忠勝が、県の布達や公示を「神戸又新日報」に掲載することを決め、同紙は準県紙に指定されている。さらに明治三十一年になると「神戸新聞」が登場、同年、大阪毎日の神戸支局が開設した。こうした動きのなか、政太郎は、出版の世界から新聞販売の世界に転進する。

明治三十六年発行の「神戸商工案内」に、書籍・新聞・雑誌販売所として川瀬三郎、吉岡平助支店、日東館書林、熊谷幸介に並んで「合名会社 船井新聞店」とある。

かなり早くから、新聞販売の世界にも取り組んできたのであろう。

栄町通クリーン作戦

栄町通まちづくり委員会は8月9日(金)10時から10時30分まで、栄町通を中心に、ゴミ拾いと不法ピラ撤去、自転車・バイクなどへの不法駐輪警告チラシ取り付け作業など、栄町通クリーン大作戦を実施した。参加者は、(元栄海3丁目協和会)奈良山喬一、(神戸市)川口雄也、(㈱広島銀行)原晃太郎、(兵庫県信用組合)宮本善弘・田中翔平・長濱孝明・杉浦早紀、(神明倉庫株式会社)藤生憲弘、十時美希、(佐野運輸)北島幸宏・末松明、(三鈴マシナリー)安本真、(走水神社)兒嶋英毅、(新光明飾)西村友博・篠原博明・大森貴美子、(佐田野不動産)佐田野宏之以上、17名のみなさんでした。毎月第2金曜日午前10時、栄町通6丁目佐田野不動産前集合の上、実施しています。お気軽にご参加ください。



神戸元町商店街 楽市楽座 情報 9月

- ◇元町1番街商店街振興組合 TEL.331-7850
水曜市 9月18日(水)11時～19時
- ◇元町6丁目商店街振興組合 TEL.367-5477
モトロク市 9月14日(土)11時～17時
- ◇風月堂ホール(有料) TEL.321-5555
もとまち密着「感雑書」 9月10日(火)
桂 二乗 笑福亭 喬若 桂 宗助
笑福亭 枝鶴 林家 染二 笑福亭 仁智
前売券は8月11日より風月堂で発売
- ◇こうべまちづくり会館ギャラリー(無料) TEL.361-4523
2019年4月より休館中(改修工事の為)
- ◇元町映画館(有料) TEL.366-2636
8月31日(土)～9月6日(金)
「ヒロシマナガサキ 最後の二重被爆者」
「1人のダンス」

編集後記

JR神戸駅近くの小さな広場に、D51が座っている。JRからやってきたときは、さらさら広場に置かれていたが、交通の目障りと移転した。現在地は、周辺のどの通りからも見通すことができない、魔法にかかったような場所だ。そのD51に光をあてようと、十月十三日(日)十時～十七時まで「西元町D51まつり」を開く。弊協議会で「ハーバーロード」から神戸駅まで、協議会の西部に位置する会員で構成する「もとまちハーバー懇談会」が、D51祭り開催経緯の豊富な国鉄マンO Bのみなさんと、弊協議会からのささやかな協力費により実現した。親子で楽しむ初めてのD51まつりにご協賛いただける方は、あいあいネット神戸・木村由己子さん(TEL.090-139731-1763)まで。

海という名の本屋が消えた (70)

平野義昌

山本周五郎5カ月の神戸(3)

清水三十六(山本周五郎)がわずか5ヵ月で神戸を離れた理由、第一は1924(大正13)年1月「須磨寺夫人」の渡米だ。夫の帰国準備のためである。一家は同年秋に須磨に戻る。三十六には夫人がいてこそ神戸だ。夫人への思いがいくらプラトニックでも、下宿に区切りをつけるべきと考えた。周五郎の妻・きん(2番目の妻、46[昭和21]年結婚)が語る。〈……なんでも船乗りのご主人が陸上勤務になられたのを機に、若い文学青年みたいのが、ごろごろしているのではまずいというので、また東京へ舞いもどってきたんだよ、と、主人は話していました。〉^{註1}

第二は、三十六が関西の人情や生活に今一つなじめなかったこと、それに東京への郷愁だろう。小説とはいえ「夜の神戸社」社長夫妻を戯画化し、醜態に描いていることから察せられる。木村久邇典は周五郎作品から上方観・江戸慕情を読み取る。^{註2}

たとえば「おさん」。大工の参太は女房おさんの不貞を疑い、逃げるように上方修業に出る。仕事は評価された。生活にも慣れた。そのまま根を下ろそうかと思うが、2年目には落ち着かなくなる。〈……魚も野菜も慥かにうまいし、料理のしかたもあっさり凝っている。だがおれは、鯛の刺身より鯛や秋刀魚の塩焼のほうが恋しくなった。酒だって江戸のあっさりしたほうが口に合うし、初めはやさしいと思った女にしても、馴れてみればべたべたした感じで、江戸の女のさらっとした肌にはかなわない。おまけに仕事の交渉の面倒なことだ。〉^{註3}

弟分からの手紙で親方の没落とおさんの浮気を知る。おさんのことが哀れに思えてくる。〈……おれの気持はぐらつきだした。自分が上方へ来たのは、厄のかれをしたようなもので、その代りにおさんが独りで厄を背負った、というふうな感じがし始めたのだ。江戸が恋しいのとおさんをどうかしてやりたいという気持が、結局こうしておれを帰すことになった。〉^{註3}

第三は、関西で筆一本の生活ができるかどうかだ。「夜の神戸社」の仕事はジャーナリズムからあまりにかけ離れていた。〈……山本が短期間の関西生活で東京に帰ったのは、大震災後の文学的新天地を関西に求めたつもりだったのが、存外、関東の立ち直りが早く、一時は東京から大阪へ移転を噂された雑誌出版社も、ほとんどが東京に踏み止まって営業を再開するという成り行きに、いち早く反応したためと思われる。半年未満の上方生活で、山本は関西でのジャーナリズムが、日本の中心となる可能性の少ないのを、すぐれた触角で感じ取ってしまったのであろう。〉^{註2}

東京は関東大震災で壊滅的被害を受けたが、少しずつ確実に復興した。出版界では、23(大正12)年1月に創刊した「文藝春秋」が継続していた。24(大正13)年1月に「文藝戦線」(文藝戦線社、青野季吉らプロレタリア文学)創刊、10月「文藝時代」(金星堂、川端康成ら新感覚派)創刊、25(大正14)年1月大衆娯楽雑誌「キング」(大日本雄弁会講談社)創刊など、作家たちの活躍の場が広がる。一方、大阪では印刷、製本、流通などが整わなかった。プラトン社は25年に自社印刷工場を建設したものの、翌年には編集部を東京に移している。^{註4}

帰京した三十六は迷いなく作家を目指す。雑誌

社「日本魂社」の記者を勤めながら文章修行だ。かつて勤めた質屋「きねや」は仮店舗で再開していたが、繁忙期に手伝うくらいだった。

26(大正15)年、「文藝春秋」4月号に周五郎の「須磨寺附近」が掲載される。同じ号には、泉鏡花、有島武郎、正宗白鳥ら文壇大物の名が並ぶが、周五郎作品は同誌の懸賞小説応募作だ。佳作4篇が毎号順番に掲載された(賞金200円は4人に50円ずつ配分)。社主で編集長・菊池寛の全体評は、「感激した作品もなく、今日の新進作家の水準を抜くものも見当らない——」と厳しい。新聞文芸欄も「須磨寺附近」を評価しなかった。^{註2}

同年、周五郎は「演劇新潮」(新潮社)の脚本募集にも当選するが、作家としての自立はまだまだである。失業あり病あり、貧困生活に耐えなければならなかった。略年譜を見ると、転機は30(昭和5)年。すぐれた編集者・文壇仲間に出会い、結婚もした(最初の妻・きよい、45[昭和20]年にガンで死去)。純文学から娯楽小説に進出し、翌31(昭和6)年から雑誌掲載が増えてくる。^{註2}

山本周五郎と神戸の関係は途絶えるが、研究者はいた。私が本稿でずっと頼りにしている足立巻一と宮崎修二郎だ。足立は「夜の神戸社」社長を、宮崎は「須磨寺夫人」を探し出した。

前回私は、宮崎の新聞コラムに読者から情報があり「須磨寺夫人」インタビュー実現、と紹介した。宮崎自身の回想では経緯が違っているので訂正する。宮崎が宝塚の公民館で講演したところ好評で勉強会を継続、受講者に「須磨寺夫人」から茶道を習う人がいて紹介してもらった、ということだ。^{註5}

足立は周五郎作品に親しんでいたが、「須磨寺附近」は未読だった。周五郎死後だいぶ経ってから、他の作家に教えられ読んだ。周五郎自身が幼稚な作品と言ひ、単行本にも全集にも入れなかったためだ。〈昭和四十八年六月二十四日、東京から文芸評論家尾崎秀樹さんから学研版『日本現代文学アルバム』第十一巻山本周五郎篇の取材のために来て、須磨寺を案内してほしいといわれた。そのとき、「文藝春秋」の「須磨寺附近」のコピーをもらい、はじめて読んで驚いた。作者は幼稚だというけれど、文体は確立され、女性の像の造形が巧妙で、しかも周五郎文学の特質である理想主義がすでにあらわれている。〉^{註6}

73(昭和48)年、須磨寺塔頭正覚院・三浦真藏副住職(当時)が足立の随筆から「須磨寺附近」を知った。三浦は周五郎作品を読み込み、須磨寺関係者として偉大な作家の処女作が無名であることを残念に思った。81(昭和56)年、足立のカルチャーセンター講義に三浦が参加したのが二人の初対面。84(昭和59)年は真言宗と須磨寺の記念の年。弘法大師1050年御遠忌、須磨寺開創1000年、平敦盛卿800年遠忌を迎え、三重塔再建計画があった。三浦はさらに周五郎文学碑を企画した。

83(昭和58)年に足立は三浦の相談を受けて猛反対。「文学碑は周五郎の心にそうものではない」と説得した。周五郎は文学賞受賞を断わり続けた人物、陸軍の報道班員就任(従軍)を拒否した硬骨漢、「曲軒」とあだ名されたへそ曲がり・頑固者だ。色紙もほとんど書かない。文学碑など壊す、と言って憚らなかった。だが、三浦の意思は堅い。足立が周五郎と縁の深い新潮社幹部に相談したところ、

賛成ではないが、既に3ヵ所に文学碑があり止める権利はない、遺族に迷惑が加かることだけは絶対やめてほしい、という回答だった。

〈わたしは、観光宣伝の目的でなく、周五郎文学に心酔してその精神を純粋に世に伝えたいのならば、方々から寄付集めしたり派手にはやし立てたりせず、真贋師一個の悲願として建立してほしい、と望んだ。〉^{註6}

足立は文学碑に刻む文章を推薦した。67(昭和42)年周五郎死去後まもなく、横浜の自宅を弔問、きん夫人から2枚の半紙を見せられた。1枚は夫人に宛てた感謝のことば、もう1枚は、「貧困と病氣と絶望に沈んでゐる人たちのために幸ひと安息の恵まれるように 周五郎」という文だった。

〈……書かれたのはおそらく死の直前で、周五郎はそのとき死を自覚し、遺言のつもりで書いたのではないか。わたしは深く感動した。そして、それを文学碑に刻むことを主張した。これなら周五郎も許してくれそうに思えたからである。〉^{註6}

84年4月7日文学碑除幕式。制作は彫刻家・速水史朗、仙台産の自然石「泥かぶり」(7トン)を切断して磨き上げた。一つに周五郎の直筆文「貧困と病氣と絶望～」を刻む。二つめには「須磨寺附近」の一節「須磨は秋であった。(後略)」(三浦・筆)。三つめが「須磨寺附近」と建立の経緯を説明した碑(三浦・筆、足立・文)である。写真

〈……「泥かぶり」はその俗称のように表面は褐色で素朴だが、内面は磨けば美しい黒色となる。石全体を周五郎の魂と見立て、その内面に真髓のことばを刻み、少し離して立てた。わたしはこの設計を実に卓抜なものだと思う。全国の文学碑をかなり見たが、独創的な点で第一級のものと思信。〉^{註6}

1995(平成7)年1月17日の阪神淡路大震災で須磨寺も甚大な被害を受けた。「須磨寺附近」で康子が清三に「人生の目的」を問うた場所「朱い山門」も壊れた。同寺の年表を見ると、火事、戦乱、自然災害のたびに復興してきた。この須磨で周五郎は「幸ひと安息」を得ただろう。不遇の時代を糧にして、読者に「幸ひと安息」を与え続けている。私は周五郎にふさわしい場所と碑であると思う。

^{註1} 清水きん「夫 山本周五郎」福武文庫、1988年
^{註2} 木村久邇典『山本周五郎 青春時代』福武文庫、1990年
^{註3} 「おさん」『山本周五郎全集』第29巻(新潮社、1982年)所収。初出は「オール読物」1961年2月号。
^{註4} 小野高裕「プラトン社の興亡」吉川編『近代大阪の出版』創元社、2010年
^{註5} 今村欣史「触媒のうた 宮崎取二郎翁の文学史秘話」神戸新聞総合出版センター、2017年
^{註6} 足立巻一「山本周五郎『須磨寺附近』文学碑」『須磨寺と山本周五郎』(大本山須磨寺塔頭正覚院、1994年)所収。初出は「山陽ニュース」(山陽電鉄編、山陽ニュース社発行、1984年5月号、6月号)



山本周五郎文学碑(須磨寺正覚院)。左の石の反対面に周五郎直筆文が刻まれている。

出来事ファイル (No.19-9)

■元町夜市

7月23日(火)、元町商店街は38回目になる「元町夜市」を開催した。各丁の振興組合では、訪れる人たちに楽しんでもらおうと、射的、ビンゴゲームのほかジャズなどいろいろな舞台を企画。中でも3丁目振興組合の、恒例になったこうべ小学校6年生の和太鼓演奏は、早くからつめかけた父兄らに囲まれ、小学生最後の音色を力いっぱい夜空にひびかせていた。



■兵庫県 新庁舎整備室設置

兵庫県はJR元町駅北側地域の集客力を高めるため、昨年7月、再整備方針を公表した。県庁舎を防災拠点として再整備するほか、同駅を商業施設と一体化、駅北側に高級ホテルなどを誘導する計画。19年度に基本計画の策定予定で、新庁舎整備室を新設、計画を検討する「新庁舎企画課」と技術的な面を担当する「新庁舎整備課」を設けることに。(神戸新聞・平成31年3月28日)



■元兵庫県令・神田孝平を偲ぶ会開催

去る本年7月6日、神田孝平公の出身地である岐阜県垂井町岩手地区において、昨年に引き続き地元関係団体等の主催により「偲ぶ会」が開催されました。先ず、同地区内の神田孝平公顕彰碑の碑前において地元県議会議員、垂井町長等の来賓および地元の皆さんが公の遺徳を偲んで献花をしました。次いで、同町タリピアセンターの原田義久学芸員が逸話を紹介しました。



公演中の原田学芸員(写真提供:岩田久男)

■第22回神戸元町ミュージックウイーク開催

神戸元町ミュージックウイーク実行委員会は、無料招待する3つのコンサートを発表した。観賞ご希望の方は、9月5日(木)までに往復はがきで〒650-0022神戸市中央区元町通3丁目13-1協和会館内(A)は「9/28主催コンサート」係 (B)は「9/29チャリティコンサート」係 (C)10/1コンサート」係あて明記の上、申し込みを。詳しくは、同委員会事務局(078-391-8448)まで。



(A)「元町でショパンと出逢う屋下がり」 ペア200組招待
ピアノ・岡田 将 ご案内・迫中宏美
9月28日(土)兵庫県公館 14時開演
フレデリック・ショパン作曲 ポロネーズ 第6番 変イ長調 作品53「英雄」
バラード第1番 ト短調 作品23 ピアノ・ソナタ 第3番 ロ短調 作品58ほか

(B)「ポーランド国樹立100周年を記念して」 ペア90組招待
ライツ室内管弦楽団チェンバー・プレイヤーズ
9月29日(日)風月堂ホール 15時開演
『雨だれ』『ノクターン』:F.ショパン 『乙女の祈り』:T.パジャレフスカほか
歌い継ぎたい「平成の名曲」(リクエスト募集中)

(C)神戸ゆかりの音楽家3人によるまちなかコンサート ペア90組招待
鈴木優人 白井 圭 伝田正則
10月1日(火)風月堂ホール 18時30分開演
ベートーヴェン:ピアノ三重奏曲 モーツァルト:ヴァイオリン・ソナタ
一柳 慧:シーンズ

■栄町通にバナー

利用される機会が稀な栄町通の街灯にバナーがとりつけられることがぎまった。神戸では御崎公園球技場で開催される「ラグビーワールドカップ2019」のもので、黄色、ブルー、赤、紫の4色がある。黄色とブルーは「4年に一度じゃない。一生に一度だ。」のタイトルで全面同じデザイン。赤と紫のデザインはそれぞれ異なる。9月中旬から10月10日ごろまでに取り付けの予定。



■神戸駅東地区クリーン作戦

第1水曜日の8月7日、神戸駅東地域クリーン作戦を実施した。参加したのは奈良山会長以下エスタシオン・デ・神戸のみなさん、ネットトヨタ兵庫(勤従業員のみなさん)のほか、元町通7丁目自治会からも地元道路清掃のため2名が参加した。



□読者プレゼント

特別企画展「城と明石の400年」

江戸時代初期の1619年、明石に城が築かれ、藩領の村々では農業用水などの生活インフラを整備、幕末維新を経て明治中期には鉄道が開通、明石は新しい時代を迎えます。本展では400年の歴史を伝える古文書や絵図・地図に加え、初代明石藩主小笠原忠政(忠真)の甲冑や、旧明石藩士ゆかりの甲冑・刀などを展示、明石の400年を紹介します。

鑑賞ご希望の方は、住所、氏名、年齢、本紙へのひと言を添えて編集部まで。先着順で5組の方にペア招待券をお送りします。期間:9月14日(土)～10月20日(日)会場:明石市立文化博物館(078-918-5400)

